

SMFラウンドテーブル2010

12月18日 埼玉県立近代美術館 講堂

概要

県内で意欲的な活動を展開するアート関係者の出会いと交流、意見交換の場として、昨年に続き(ラウンドテーブル)を開催しました。活発な議論の交わされる場とするため、「キタミ・ラボ舎」に企画協力を依頼し、ユニークな会場設営やアーティストの選定に趣向を凝らしました。

会場となった講堂には、演壇上も含めて5台のお手製の巨大コタツが置かれ、色とりどりの古びた毛布やくたびれた掛け布団がにぎやかでざっばらんな雰囲気を醸し出していました。さながら飯場のメリークリスマスといった風情で、何かがはじまりそうな雰囲気が漂っていました。このストーブリーグならぬコタツリーグに集ったのは、埼玉県を中心にユニークなアート活動を展開するおよそ50名の多才多岐のメンバーです。

午前中の第1部では都合9件の活動事例紹介、午後には第2部で「wah」の南川憲二さん、「KOSUGE1-16」の土谷享さん、「port B」の高山明さんの3名のアーティストから、話を聴き、第3部では参加者全員がその3名のアーティストを中心に3班に分かれてグループミーティングをおこなうという流れで、刺激に富んだ、密度の濃い本気の話があちこちで交わされる貴重な機会となりました。

中村誠(SMF事務局)

第1部

参加団体・個人の活動報告

ここでは県内各地で、とてもユニークな活動をされている9つの団体のプレゼンテーションがおこなわれました。「KAPL(コシガヤアートポイント・ラボ)」の浅見俊哉さんは(5750分展II)と今年度の活動について、「アートフェスタ実行委員会」の奥西麻由子さんは「森林公園アートフェスタ」の取り組みについて、「ヒアスンスハウスの会」の高橋博夫さんは詩人立原道造の紹介と会の活動について、「タカサカハウス」の西山佳孝さんは地域資源を活用した事業について、「交差するまなざし@KAWAGOE」参加アーティストの間地紀子さんは子どもたちとの共同制作と

その成果について、「南浦和アートセンター」の安野太郎さんは「Minamiurawa Art Center(サイタマック)」のネットを中心とした発信活動について、「JIA埼玉(日本建築家協会埼玉支部)」の三浦清史さんは主に(自在の間)のプログラムについて、「キタミ・ラボ舎」の金田翔さんは現状と「おもしろ不動産」の活動などについて、「川口市立アートギャラリー・アトリア」の川崎久美さんは「アーティスト・イン・スクール」について一それぞれに資料や映像を用いた特色のある報告で、埼玉の人材の豊かさやアートの可能性を感じさせる興味ぶかい内容でした。

野本翔平(SMF協力委員)

第2部

アーティスト・プレゼンテーション

3人のアーティストが壇上のコタツに潜り込んで午後の部がスタート。北本市生涯学習課の五十殿彩子さんが、各アーティストを紹介し、南川さん、土谷さん、高山さんの順に、それぞれのユニークで刺激的なプロジェクトや方法論についてお話いただきました。

① 南川憲二「アーティストがいない」

「川の上でゴルフをする」とか「地面の中の家がある」といった突拍子もないアイデアを実際にやってのけて、「やってみてから何がおもしろいかを感じていく」という南川さんら「wah」のダイナミックな発想と行動力には大

笑いながら脱帽です。現在は北本団地で(船に乗って無人島に行きたい)という子どもたちと「はみ出し探検隊」を結成、団地の広場に持ち込んだ漁船「はみ出し丸」をシンボルに、船出の日をめざして活動を続けています。

② 土谷享「祭りのつくり方」

「ご近所との持ちつ持たれつ」の関係が好ましい、「アート」の分野では作る人しか育ててこなかった。見る人、支える人を育てることも必要で、逆にまた見る人が作る人を育てることもつながる」という「KOSUGE1-16」の土谷さん。力士づくりから、タニマチ集め、ちゃんこ、千秋楽、優勝パレードまで、さまざまなワークショップの複合体ともいえる(巨大紙相撲)は、そのような関係づくりの仕掛けと構造を持った作品でもあります。

③ 高山明「観客」の時代に向けて」

「ここ数年いわゆる舞台的なものはつくっていません」と語る「port B」の高山さんは、(個室都市 東京)や(完全避難マニュアル 東京版)などで日常空間と芸術空間の境界を曖昧にし、両者を攪拌する過激な作品を展開しています。「お客さん自身が、パフォーマーであ



左から南川さん、土谷さん、高山さん、進行の五十殿さん



り、観察者であり、ジャーナリストや報告者にもなる仕組み作りを考えてやっています」という高山さんの作品は、むしろインсталレーションやパフォーマンスに近いと思われます。

お三方ともアートやアーティストという呼称にあまりこだわりはなく、制度化された既存のアートの枠組みというものをいかに脱臼させるかというようなプロジェクトを展開してきたという点では共通しています。インパクトのあるお話は来場者にも大好評で、ますます自熱の分科会へとつながりました。

中村誠(SMF事務局)

第3部

分科会「アートに人をまきこむ」

【土谷班】

ここ数年、各地を巡業していた「巨大紙相撲」が気になっていました。その仕掛け人の土谷享さんが20代で「ご近所さんとの持ちつ持たれつ」に目覚めたことがまずうれしい驚き。「巨大紙相撲」では、子どもたちが商店街の「タニマチ」を探して懸賞品を集めたり、高齢者の方たちがにこにこチョコ鍋の準備をされたりと、想像以上に多くの異世代をつなぐ仕組みだったことを知り、迷わず「土谷コタツ」にもぐりこみました。

集まってきたのは、やはり東松山や越谷などで地元の人たちをハッピーにしようとしている面々。土谷さんは、このコタツ仲間10数名の話も聞きたいと言ってくださって、もちろんそれぞれの話はおもしろいだけけれど話がまとまらず、弱ったなあと思った頃に「レジェンド」「都市伝説」というキーワードが浮上。「アートには地域に眠っている力を呼び起こす力がある」、「アートは既成の価値観を壊すこともできる」、「新しい都市伝説を創ればいい」、「そのためには私たちが本気でおせっかいする人たちがいないとね」と、すてきにまとまった分科会でした。

山尾聖子(SMF運営委員)

【南川班】

分科会ではまず委員の高橋さんが、南川さんのような若い世代のアーティストが作品

を作ろうとする意志やその作品が自分のものだという所有意識を手放すということに逡巡せずに、さっぱりとした姿勢で臨んでいることに率直な驚きを表明しました。

南川さんは「美術作品として美術館のお墨付きをもらった作品ならば、それはすばらしいのだろう」という前提を問直し、私たちの生活に直結するアートって本当にあるのだろうか?と投げかけます。美術大学では立派な作品を作りなさいと教育されますが、南川さんは「そういう表現の中に自分が作りたいモノが無いんだ」ということを自覚してからは、いろいろなことが楽になったといいます。そして美術館で立派な作品を見ていると、その作品を見ている多くの人々の後頭部も同時に見ることになるような、一方の視線だけで見られることに違和感を抱いたそうです。

多くの人々の「こんなことをしたい!」という強い思いを受けとめて、それこそ人々を丸ごとアートにする不思議なおおらかさに直に向き合えたラウンドコタツでした。

柴山拓郎(SMF運営委員)

【高山班】

高山班は主にアートプロジェクトについて、作品を制作することについて話が進められました。まず高山明さんから、「アートというアライバイを使ってアートをやっていることが問題。地域のため、市民のためという文言で活動をしていると必ず足をすくわれてしまう」という切りだしがありました。また、「わたしは常に自分が問われる場所で活動しているのであり、活動をしたことで自分がどれだけ変わったかだけが確かなことだ」というアーティストの姿勢も聞くことができました。

次第に話題はアートプロジェクトに移ります。高山さんが実際に見た一例として、ある地域では風俗街が行政のおこなうアート事業によって撤退し、その空き店舗にアーティストが住み始め、まちが活性化して市民に喜ばれた。しかし、立ち退きを余儀なくされて行き場を失った人がアートに対して持っている考えと、まちが活性化して喜ぶ市民のアー



トに対する考えとは全く異なったものだったということが語られました。高山さんは、異なる考えを持つ双方の人たちと丁寧に関わり、話を聞くなかで、「アーティストとして両方の側をみるのが大切だ」と再認識したということです。さらに「今のアートプロジェクトは、ひとつの形のシステムでしかないと思う。各地でこれだけ盛んになってきた活動の、それぞれに何かの発明があるはず。それを見つけてほしい」と結ばれました。

浅見俊哉(SMF協力委員)

SMFラウンドテーブル2010を終えて

今年の(SMFラウンドテーブル)にも、さまざまな「顔」の、さまざまにちがった「目」をもつ方々が集いました。表現の場に身を置いている人びとと語らうのは、表現された作品に對峙するのはまたちがった回路で脳が刺激されます。言葉のやりとりによって互いの思いや考えが深まることも、それぞれの具体的な人そのものが発するイメージが拡張するスリリングな体験といってもいいかもしれません。そのスリルを生む前提となっているのは、この(ラウンドテーブル)が表現者・鑑賞者といった区別無く、同じレベルのテーブルについて交感できる場になっているからであることは言うまでもないでしょう。

埼玉という地域の共有、また同じ時間の共有によって、さまざまな「顔」やちがった「目」の存在が浮彫りになっていくことで、それぞれの日常に他者の存在が新たな回路をつないでいくような経験が深まるのはすばらしいことでしょう。そしてさらに、その経験が各々の価値観に揺さぶりをかけて更新するところまでいけば、「ラウンドテーブル」と「SMF」、このふたつの言葉はほぼ同じような内容を指し示すことになるのかもしれませんが。

青山恭之(SMF運営委員)